

第4章 「現象の集まり」が表現している意味を読み取る

私たち人間は、多くの現象で構成される環境の中で生きており、その環境の中で様々な現象を知覚している。こうした環境こそが、私たち人間が生きる世界であり、人間は現象を介してこうした世界とつながっている。

現象を知覚し現象群が表現する意味を掴みにいくという行動を積み重ねること、即ち、現象に直接向き合う思考こそが、人間が生きる世界の在り方を適切に認識することへと導く。

第1章から第3章まで、以上のようなことを説いてきた。そこで浮かび上がってくるのが、現象群が表現する意味をどのようにして掴みに行くのか、という問題である。現象に直接向き合う思考に具体性や実行可能性を与えるには、この問題に対する答を明らかにする必要がある。この第4章では、これに取り組む。

私たちがある課題を抱え、その在り方や状況を知ろうとする時、多くの現象を知覚することに努める。それは事実から得られるものであったり、自分の感覚から得られるものであったり、関係する人たちの言葉から得られるものであったり、関連する過去の記録から得られるものであったり、と様々だ。

自分や他者の感情を察知することができれば、もちろんこれらも現象として受け止める必要はない。即ち、心理現象や心的世界の現象も、私たちは現象として受け止める必要があるのだ。現象に直接向き合うということは、知覚できるあらゆる現象を、先入見や既存の常識や一般的な理論に囚われずに、受け止めることなのだ。

こうして知覚された現象群が、何らかのルールの下に構成された集合として捉えられる場合、これを「現象の集まり」と呼ぼう。この「現象の集まり」が何らかの意味を表現している。その意味が解るか解らないかに拘らず、間違いなく意味は存在している。

「現象の集まり」とは、何のルールもなくランダムに箱の中に放り込まれた多くの物から成る全体のようなものではなく、多くの単語で構成された文章のようなものである。つまり、「現象の集まり」には、文章における文法のようなものや表現法のようなものが内在している。このような“文法”や“表現法”に則って現象が並べられたり関連付けられたりして、「現象の集まり」が生成される訳である。

ここで、単語の集まりである文章のことを考えてみたい。私たちは言葉を持っている。その最小単位が単語である。私たちは単語を並べて自分の意思を表現したり、

他者に伝えたりすることができる。

多くの単語を無秩序に並べただけでは、こうしたことはできない。何らかのルールがあって、それに従って単語を並べると、その単語の集合が何らかの意味を表現することになる。私たちはその意味を自分で確認したり、他者に伝えたりしているのだ。このように並べられた単語の集合のことを、私たちは文章と呼ぶ。

文法とか表現法と呼ばれているものが、単語を並べて文章を構成するためのルールである。文法や表現法に則って単語を並べて構成された文章からは、それが表現している意味を読み取ることができる。

比較的短い一つの文章を“単文”と呼ぶことができる。単文は何らかの意味を表現している。意味を表現している単文の集合は、段落とか節とかパラグラフと呼ばれ、単文が表現する意味よりも更に上位の意味を表現している。

そして、こうして構成されるパラグラフもまた集合となって更に上位の意味を表現し、小説、論文、随筆、詩歌、といったものを作り出しているのである。表現する意味が上位へいけばいくほど、それは壮大なものになっていく。単語の集まりである文章とはこのようなものである。

こうした特性を持つ文章のことを頭に置いて、「現象の集まり」のことを考えてみる。「現象の集まり」にも文章と同様のことが言える。単一のものとして捉えられる最小単位の現象のことを“単一現象”と呼ぶことにしよう。

複数の単一現象を何らかのルールに従って並べると、これが何らかの意味を表現することになる。このようにして並べられた現象の集合が「現象の集まり」である。この「現象の集まり」のことを“現象文”と呼ぶことにしよう。

比較的小さな現象文が或る意味を表現し、こうした小さな現象文の集合がさらに上位の意味を表現することになるのは、言葉の文章と同様である。現象文も、表現する意味が上位へいけばいくほど、壮大な意味を表現するようになる。

例えば、ある国境地帯で武力紛争が発生したとする。その国境を挟む両国は、それぞれが別々の経済圏に属している。それぞれの国には大国との政治的なつながりや同盟関係が存在し、国連などの国際機関での外交活動が活発に行われている。

こうした現象の集合が構成する「現象の集まり」は、それぞれの現象が持つ意味を超えてさらに大きな意味を表現している。国際関係の全貌とか、世界規模での国際政治の流れといったものがそれに相当する。

現象文が生成された時、そこには、現象に関する何らかの文法や表現法のようなものが内在している。これを“現象文法”と呼ぶことにしよう。この現象文法がどのようなものであるかを解き明かすことが、現象に直接向き合う思考に具体性や実行可能性を与えることになるだろう。

“現象文法”という呼び名によって確立されたものは未だ無い。しかし現象文法は間違いなく存在している。それがどのようなものかを以下に明らかにしていこう。

現象の集合を「現象の集まり」として捉えるに当たって、そこに意味を湧出させるために、多くの現象を何らかの基準に基づいて、何らかのルールの下で、分類したり位置付けたりする。現象を扱うこうしたやり方は現象文法の一部を成している。現象文法としてよく実践されるものを以下に挙げてみる。

- ・ 現象を時間の流れに沿って位置付けて整理する。（時系列、時代性）
- ・ ある時点で同時に現れた現象を一まとめにして整理する。（同時性、時代性）
- ・ 現象が現れた場所ごとに整理する。（地域性）
- ・ ある人や人間集団に関係付けて現象を整理する。（社会性）
- ・ 類似の、同類の現象を一まとめにして整理する。（類似性）
- ・ 現象を因果関係で関連付けて整理する。（因果律、要因と特性）
- ・ ある課題やテーマを軸にして、この軸との関連性で現象を整理する。（テーマ軸）
- ・ 仮説を立て、これを軸にして、この軸との関連性で現象を整理する。（仮説軸）
- ・ 既存のフレームワークを使って整理する。（SWOT分析など）
- ・ 既存の情報整理法を使って整理する。（ツリー構造、フローチャート、マトリックス、マインドマップ、など）
- ・ その他

以上に上げたもの以外に、個人が独自の個性で実践しているものがある。一般的な枠組みとして説明することはできないが、そのようなものは明らかに存在する。そして、これのほうが独創性があり、より創造的な意味を引き出すことにつながる。例えば、次のようなことを目の当たりにすることは多い。

ある人は知覚した現象を情報として表現し、この全部を大きな空間に自由に配置する。この配置を俯瞰しながら、これらの現象群が表現する意味を追求し、それを見出す。こうしたケースでは、現象文法は当人の頭の中に存在するだけで、具体的には誰も知ることができない。読み取った意味とそのように捉えた背景を、当人から伝えられて理解するだけである。

湯川秀樹博士が中間子理論に到達するまでの思考の体験が「旅人―湯川秀樹自伝―（角川文庫）」221ページからのくだりに語られている。この過程はまさに、湯川博士独自の現象文法の探索の過程であり、これを獲得することが、関連する多くの

現象が織り成す「現象の集まり」が表現している意味を読み取ることを可能にしたと言える。この意味こそが中間子だったのだ。

上記に10項目を上げた現象文法の要素に関しても、個人的裁量の入り込む余地はきわめて大きい。どの手法を使うか、どの手法とどの手法とを組み合わせるを使うか、どの類の現象にどの手法を適用するか、などといったことは個人的裁量の下に置かれているからだ。

一つの事例として湯川博士の中間子を上げたが、もっと身近にある事例を紹介してみよう。私自身が工場の現場で経験したものである。

ある工場で、生産設備から発生する油煙を吸引し、そこから油成分を分離回収する装置を運転していた。吸引した油煙を沸点の高い溶剤に溶け込ませ、その混合液を成分の沸点差を利用して分離するというものだ。

溶け込ませた油煙の成分を蒸発させるために装置内で使われていたのが真空ポンプだ。真空ポンプで装置内の圧力を下げていき、油煙成分の沸点が常温となる圧力にまで下がると、油煙成分のみが気化して溶剤成分は液体のまま流れていく。

気化したガスを液化装置に送って圧力を大気圧に戻すことにより、油煙成分は液体の状態で回収される。こうしたプロセスを連続的に行う装置だ。

この装置でトラブルが発生した。かなり長いインターバルなのだが、真空ポンプに異常が発生して停止してしまうことが度々起こったのだ。調査の結果、真空ポンプに多量の水が入り込み、それが停止の原因であることが判明した。

そこで、水がどのようにして入り込むのかを調べ始めた。ところが全く判らない。油煙と溶剤の混合液が唯一の対象だが、そこに混入している水分は大気中の水蒸気が溶け込んでいたり、微粒子状で浮遊していたりするもので、ごく微量でしかない。

一体この多量の水分は何処から来るのだろうか。装置のシステム系統図や配管図を睨みながら多様な考察をしてみるのだが、全く判らない。でも、装置内に多量の水が発生していることに間違いはないのだ。関係者の誰もが頭を抱え込んでしまった。

色々と考えあぐねている中で、一人の現場技術者が提案した。実際に装置内の何処に水が存在しているのかを調べてみようというものだ。関係者の多くは、そんなものはない見つからないだろうと思っていたが、実行に移すことになった。

取り外しやすい箇所から始めようということで、油煙を溶剤に溶け込ませるための、スクラバーと呼ばれる反応塔から着手した。スクラバーの底部には保守作業の際に

溶剤を抜くためのドレンパイプとバルブがある。その溜りに比較的多量の水が発見された。

この水が発生する原因は容易に解明された。油煙を吸収した溶剤はスクラバーの下部に溜り、これがポンプで蒸留装置へと送られる。ポンプの吸入口はドレンパイプよりも高い位置にあるので、混合液内に浮遊している水の微粒子の一部は長い時間を経てスクラバーの底からドレンパイプに沈殿するという訳だ。

設計技術者は考えた。これと同様の現象を起こす部分が他にもあるのではないかと。現場技術者と設計技術者はすぐに現場に入った。ドレンパイプに水が溜まるプロセスを頭に描きながら、装置の配管を調べていった。

その結果、混合液が流れる配管にU字状になっている部分が一箇所あることを発見した。ここにはドレンパイプと同じ理由で水が溜まるはずである。しかし、そこに水が溜まっても、水はU字状配管の底部を占めるに過ぎない。その上部を通して混合液は流れ、水は真空ポンプには至らないだろう。

だが、長い時間を経たらどうなるだろうか。底部の水は徐々に増え、ついには配管を塞ぐことになるだろう。その時水はポンプの圧力でU字状配管の下流に押し出されるはずだ。恐らく、真空ポンプの停止の原因である多量の水はこの水に違いない。

これが調査の結論だった。U字状配管の底部に穴を開けて細い配管をつなぎ、底部の混合液を小さなポンプで吸い出して本流に戻すための改造が施工された。これでU字状配管の底部に水は溜まらないはずだ。それ以降、真空ポンプの異常停止の発生は無くなった。

この事例が示していることは次のようなことである。

- ・ドレンパイプの水を発見する以前には、意味を湧出させる「現象の集まり」を構成することができなかった。
- ・ドレンパイプの水という現象をこれまでに把握している現象に加えることにより、同じような箇所が他にもあるのではないかという仮説が生まれた。
- ・この仮説を検証する行動、即ち新しい現象を知覚するための行動が生まれた。
- ・U字状配管の存在という現象、類似の箇所に水が溜まっていたという現象、真空ポンプが多量の水が原因で停止してしまうという現象。こうした「現象の集まり」が、U字状配管での水の沈殿により長時間を経て溜まった多量の水が真空ポンプに送り出される、という意味を湧出させた。
- ・明確な一言で表現することは困難だが、この意味の湧出の背後に現象文法が機能

していたことを感じ取ることができる。

- ドレンパイプの水、U字状配管の存在、多量の水の発生の仕方など、全ては現象に、現物に、現場に直接向き合う思考と行動から見出された。システム系統図や配管図などの作られた情報からは決して見出すことはできなかつただろう。

現実の事例に見える通り、「現象の集まり」が表現している意味を読み取るとは、「現象の集まり」が現象文法に則って湧出している意味を読み取ることなのである。

以上、第1章から第4章までに説明してきた内容を「現象思考学」と名付けよう。